

秋の特別展

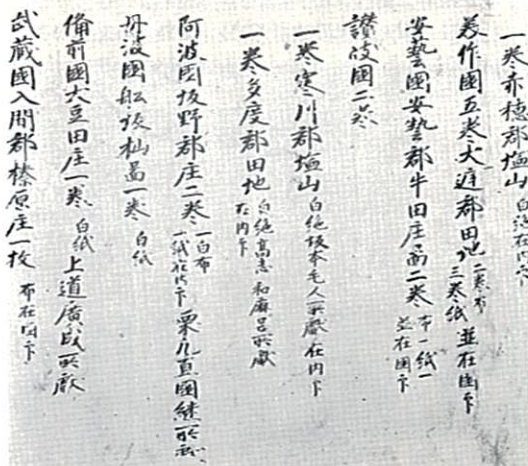
岡山県の中世

— 古文書よりみた —

10月2日より11月11日まで

昨年度の「岡山県の絵画」展のあとをうけて、本年度は「岡山県の中世」展を開催いたします。中世の資料としては、絵画・彫刻・石造美術等、多くの文化財が残されていますが、今回は、そのなかでも歴史そのものを記録した古文書類を中心に展示し、岡山県の中世史の一端を紹介したいとおもいます。

岡山県の中世文書は、金山寺・吉備津神社等、主として県内の大社寺を中心に保存されておりますが、荘園領主も多くが都の貴族・寺社であつた関係上、畿内の古社寺にも数多くの貴重な記録がつたわっています。



重要文化財 西大寺資材帳 (部分) 宝亀11年
奈良 西大寺蔵

(例えば、備中新見庄の史料は京都の東寺文書のなかにみられるように。)

これら県内外の古文書を一堂に集め、岡山の中世史のなかに位置づけてみようと考えています。

ご存じのように、古文書は紙に文字が記されているのみで、専門家以外の人々にとっては、なかなかなじみにくいものです。文字が読めなかったり、読めても内容がつかめなかったりで、どの文書も同じように見え、それぞれの文書が持つ歴史的な意味まで把握するのは容易なことではありません。

今回の特別展はおそらく他館ではあまり例がない地味な展覧会になるでしょうが、個々の文書を通じて、どこまで歴史の歩みが紹介できるかという、いわば実験的な試みだといえましょう。

次に、今回出品される古文書を主題にそって紹介します。

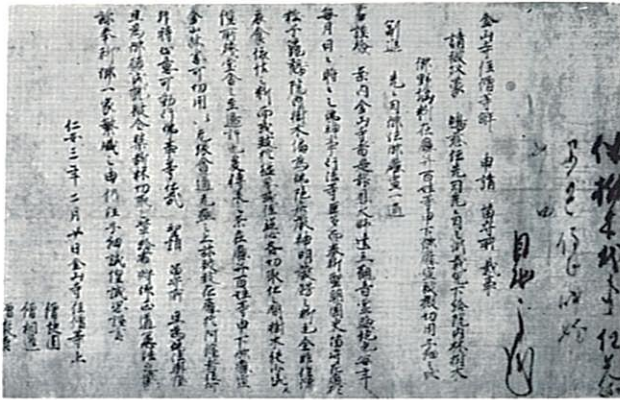
① 古代の終末

奈良時代の終りごろから、古代の社会体制が崩れていき、各地に貴族・社寺の私有地である荘園が発生していきます。

「西大寺流記資財帳」(重文)や「大安寺資財帳」(重文)で奈良末期の岡山南部の状況を、「備中国足守庄図」(重分)「梶原景時書状」(重文)で、平安時代の荘園の姿を、「備中国服部郷図」では鎌倉中期の農村の状態を紹介します。



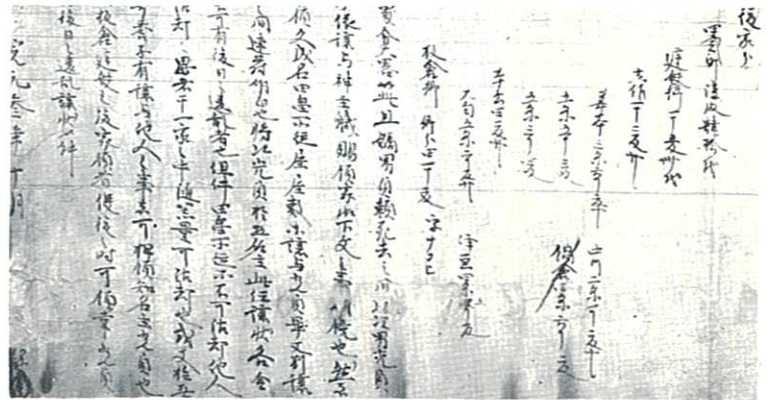
信長朱印「天下布武」
荘家文書



重要文化財 金山寺僧等解 仁安3年
岡山 金山寺蔵

③ 鎌倉時代の武士と民衆

鎌倉時代は武士の時代であるといえます。新興階級である武士は幕府の守護・地頭として、また荘園の代官として、民衆のうえに君臨しております。県内の武士の活動と民衆とのかかわりあいを「吉備津社文書」「安養寺文書」などによって紹介します。



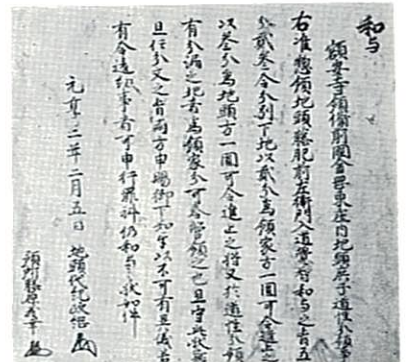
神主賀陽氏沙弥某讓状 (部分) 寛元3年 岡山 吉備津社蔵

④ 鎌倉時代の新仏教

鎌倉時代は、新しい宗教の時代だともいえます。浄土教系の新宗派・禅宗・法華宗などが成立し、その信仰が民衆のなかにも浸透していきました。県内から浄土宗の法然、禅宗の栄西・元光等の高僧が輩出し、重源も東大寺再建のために県南で活躍しました。「誓願寺孟蘭盆縁起」(国宝)「法然上人七ヶ条制法」(重文)「寂室元光墨蹟」(重文)「南無阿弥陀仏作善集」(重文)によって、それらの人物を紹介します。



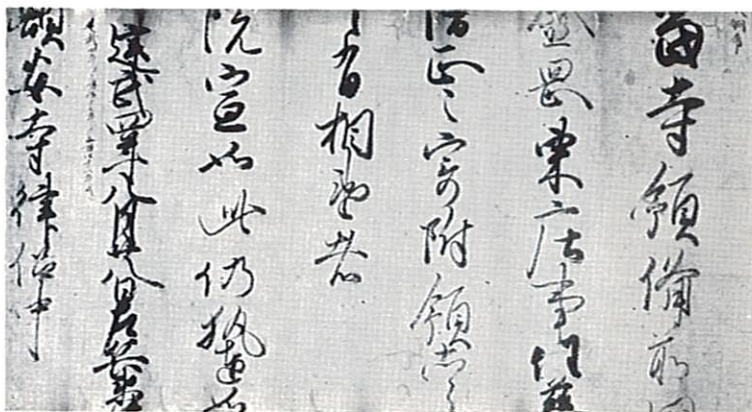
国宝 誓願寺孟蘭盆縁起 (部分) 栄西筆 治承2年
福岡 誓願寺蔵



重要文化財 備前国金岡東庄和与状 (部分)
元亨3年 奈良 額安寺蔵

⑤ 荘園制の展開

中世の歴史は荘園をめぐる荘園領主、武士、民衆の葛藤の歴史であるといえます。備中新見荘・備前金岡荘の姿を紹介します。



重要文化財 光厳上皇院宣 建武4年
奈良 額安寺蔵

⑥ 南北朝の内乱

鎌倉幕府から室町幕府へ武家政権が交代するなかで、武家の勢力は強力になり守護大名の支配が強化されてきます。内乱の状況、山名・赤松2大守護の動きを紹介します。

⑦ 中世の民衆と文化

歴史を動かしてゆく原動力である民衆の姿は、古文書のうえにはなかなか現われてきません。県内の古社寺の文書のなかから、農業・商工業・食生活・祭り等の様子を紹介します。

とくに「妙覚寺文書」によって日蓮宗不受不施派の祖、日典・日興の業績をしのびましょう。

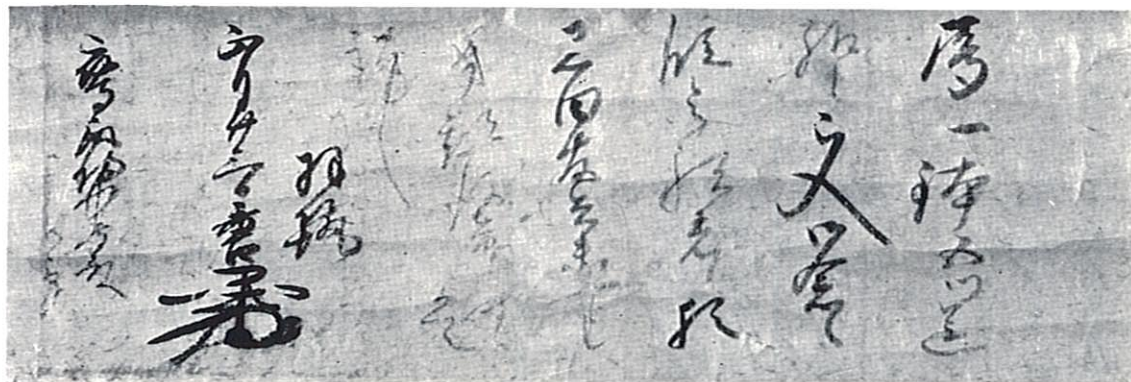


県指定重要文化財 神事絵巻(部分) 室町時代

岡山 吉備津彦神社蔵

⑧ 戦国時代

下剋上のことばがしめすように、実力のある武士が、古い権威を破壊して、新しい近世社会を創造する時代です。山陰から尼子、西国から毛利、地元の岡山から浦上・宇喜多の諸将が現われ、やがて豊臣秀吉の統一へ吸収されていきます。主として美術や備中北部の古文書によって、この時代を紹介します。(三好基之)



豊臣秀吉書状 桃山時代

岡山 鷹取早水氏蔵

外人館内連れある記

ここ数年間にずいぶんたくさんさんの博物館を見せていただきましたが、英文パンフレットを用意して外国人入館者に便宜をはかっておられるところがかなりあるようでした。また、個々の展示品についても、英文の解説を添えておられるむきもあるやに聞き及んでいます。

私どもの館は特別名勝後楽園の真ん前にあり、入館券が入園券と共通になっているという特殊な事情もあって、毎日数人から十数人の外国人の入館者があるのですが、只今のところ、邦文による概説と品名表示がせい一杯で、外人客にはなほなだ不親切な仕儀となっています。一昨年開館して以来、とにかく忙しさにかまけて、これら外人入館者へのサービスにまで気がまわらなかった私が、ふとしたことから彼等と応待することになりました。

それは、ようやく桜の花の散り始めた4月のある日のことでした。受付嬢が私のところへ来て、外人客が岡山城と岡山美術館への道を尋ねているらしいのだけれど、返事がうまくできないので来てほしいと言うのです。

他課に属さないことはすべて総務課の分掌とするという極めて単純な理由から、また、過ぎし日に(三十年近くも前のことですが)何年間か学校できんざん痛めつけられた経験もあり、何のこのくらいと思って腰をあげたのですが、さて実際にあたってみると、外国語による意思の伝達のなんと難かしいこと。ごく初歩的な道案内さえうまくできず、ついには地図を出して通路を指でたどりながら、思



い出す限りの単語を羅列する有様でした。私は困がりのというよりも何とも情ない気がしました。

この出来事を機に、私は日本語のわからない外人入館者が本館の展示をどのように理解していくのか気になりはじめました。彼らの多くは展示品が何であるかをせいぜい推量するぐらいで、わが館が意図している「岡山県の歴史」(これは日本の歴史の縮図でもあるのですが)の推移については、ほとんどわからずじまいに帰っていくのではないのでしょうか。とすれば、日本人同様の料金を払って入館する外国人に、本当に気の毒な感じがしました。

そこで、これら海外からの訪問者に対して、せめて簡単な応待ぐらいできるようになれたらと思いたち、県総文化センターの初級英会話講座へ通うことにしました。五十の手習いとはまさにこのことでしょう。

私は、とりあえず岡山城・岡山美術館への道順と、本館展示品の主なテーマだけを英語で説明できるよう練習しました。

同時に、受付員に対し、外国人に何か聞かれたら私に連絡させ、もし希望するなら、若干の説明もする用意のあることを告げることにしました。遠来の客に対して下手なりに私の英語が少しでも役に立てばとのささやかな配慮であり、私の責任の一部を果たすような気持でもありました。

こうして、私は外人相手に訥訥と館内の説明をしてまわることになったのですが、女子看視員たちは、私のことを Pardon-man と陰口をたたいているようです。はためにも、私が Paradon? を連発しているのがおかしいのでしょう。

外人客の多くは、私の話力(?)をすぐに見ぬいて、なるべくやさしい単語で、ゆっくりと質問するなど気を使っ



てくれます。スペルがわからない時など自ら辞書を引いて指さしてくれることもあり、私の表現が英語に似て実は全く異なるものであることを指適してくれることもあります。おそらく私の言いたいことは何とか理解できて、その broken English にはかなり閉口したのでしょう。

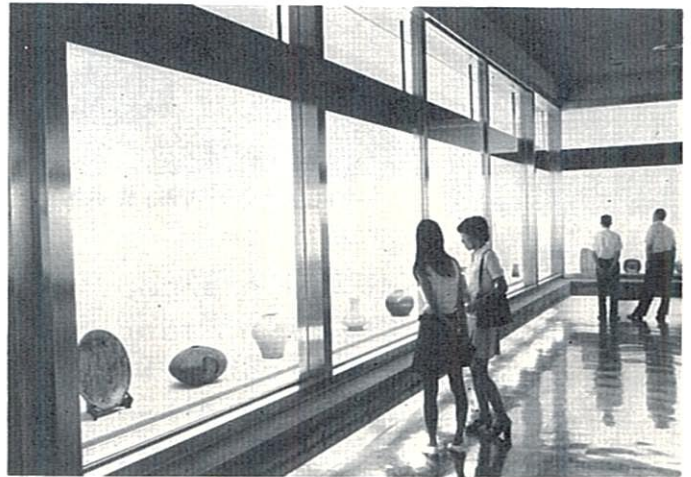
ともかく、夏のバカンスの期間のせいもあってか、この2・3ヶ月の間に十数ヶ国の人々に接し、まことにお粗末ながら館の説明らしいものをほんの少々したわけですが、珍談の類いもかなりあります。縄文時代がどうの、弥生時代がこうのと、得々として聞きかじりをしゃべった相手が、実はさる国の著名な考古学者であって、ひや汗をかいたこともありましたし、僅か数十分の対話の後、appreciate を繰り返しながら、渡米したら是非寄ってくれと、私の手を握って離さなかったカリフォルニアの老婦人の方もいました。また、私の英語の誤りを全部書きだして訂正してくれたハワイのお嬢さんに、彼女の希望を容れて備前焼の実習をあっせんしてあげたこともありました。(彼女の作陶実習を快諾され、終始ご指導を頂いた備前陶芸センターの所長さんをはじめ皆さまに、この紙上を借りて厚くお礼を申し上げます。) 一口に外国人といっても、全く多様で、英語を話す人ばかりとはかぎりません。そんな人たちと互に手さぐりでかわす英会話も、なかなか味のあるものです。

たとえば、すべて三人で合議してから質問や返事をしてくれたフランスのOL嬢、私以上に英語の語いの乏しかったブラジルの美人の奥さんとの和英・英葡・葡英・英和の四辞典を駆使(?)しての対話なども思い出に残るもので

ありました。苦労の末の意思交換ほど、一層感慨深いものであります。

苦労といえば、私はいま本館の英文ガイド・ブックをつくらなければならないはめに立ち至っています。というのは、ある日、例によって館内を案内した夫婦の米人から是非にと懇請されたからです。私が身の程もわきまえずその制作を約束したのは、彼等のうち主人の方が外見上私遠と寸分変らない日系米人であったので、何となく彼等の気持がわかるような気がしたからでしょう。

(もし、英文の概説パンフレットをお作りになっておられる館がありましたら、参考にさせていただきたいので、



ご一報くださいますようお願いいたします。)

ともあれ、固い握手と共に Thank you very much! とほゝえんで館を去ってゆく外人客のうしろ姿をみると、私はまた、性こりもなく May I help you? を繰り返すことでありましょう。(小野田 修 総務課長)

第5回 学術講演会

日時 10月13日(土) 1時30分から 4時30分まで
場所 岡山市後楽園 岡山県立博物館講堂
講師 岡山大学名誉教授
藤井 駿氏 「岡山県の中世」
および 広島大学教授
河合 正治氏 「中世の瀬戸内海」
聴講 無料

お知らせ

- 秋季特別展「岡山県の中世—古文書よみみた—」が11月11日(日)に終了した後、11月15日まで後期常設展準備のため休館いたします。
- 昭和48年後期常設展は、新鮮な構想と貴重な資料で、「岡山県の歴史と文化」を示したいと考えています。
行楽のシーズンにご一家揃ってご来館ください。
- 民俗部門では今はもう珍しくなった山仕事の道具をいろいろと展示いたします。
- 館蔵品の中から代表的なものを8点選び、原色絵はがきにしました。1組200円です。ご利用ください。

五島美術館「中国地方の古陶（古備前・亀山焼）」展を見て

小雨に煙る………と言いたいところだが、台風6号の影響を受けて、断続的に強い雨の降る武蔵野。五島美術館

「中国地方の古陶」展最終日(7月29日)は、そういう雨天の日であった。

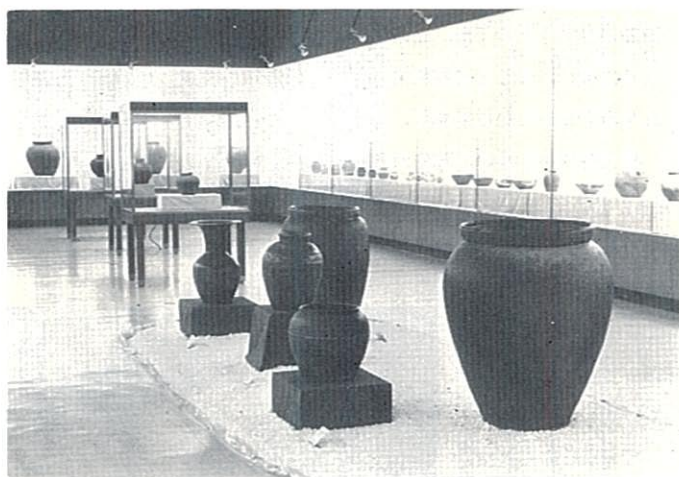
今回の展示物の約2割が、岡山県立博物館所蔵の備前焼——しかも、主に鎌倉時代・室町時代の地味な生活雑器——なので、東京での評価がどうであるか心配でもあるし、もちろん自分の勉強も兼ねて訪れたわけであった。会場を一巡してまず驚いたのは、資料収集のご努力と編年のご見識であった。すなわち、岡山から遠く離れた東京の美術館が、多少のものはあ

るにせよ、よくもこれだけ多くの方々から多種類にわたって集めたものだという感歎であり、今まで業者や数寄者の

勘だけによってなされてきた年代決定を、多くの問題を含みながらも、既成概念にとらわれることなく、科学的に、考えなおそうとする試みに対する喜びである。

備前焼と言えば、桃山時代の茶陶を期待する人が多いだろうが、このような、地味ではあっても、生活に密着した備前

焼本来の姿を見てもらうことも、大変意義深いことではなからうか。いわゆる六古窯のひとつである備前の窯業を考えると、ひじょうに有益な展観であった。(上西節雄)



「中国地方の古陶」展示場

東京・五島美術館

新収品紹介

絹本着色

大威徳明王像
139.7×76.0

一幅
14世紀

大威徳明王は密教において尊重される五大明王のひとつであるが、藤原時代後期以降、勝軍大威徳法にもとづき、戦勝祈願の本尊として、この一尊に対する信仰もひろまった。本図は例の如く水牛の背に坐した六面六臂六足の像を真正面むきに描いており、おそらく独尊礼拝図として制作されたものと思われる。右手には三鈷の戟と輪宝を、左手に剣と宝棒を持ち、残る二手を胸前で合わさせて印を結ぶ。これは現図胎藏界曼荼羅のそれと一致しているが、大海の岩礁上に跏趺座を置き、像全体がその上に乗っている点は他に類例が少ない。切金の使用等装飾的な表現は概して少なく、金泥でひかれた頭髮や抑揚の強い衣文線なども後の筆であろう。なお、本図には、もとの表装裂と考えられる切れ端が付随していて、「和州内山永久寺無量寿院」の墨書があり、その伝来を想定することができる。ともあれ、本格的な密教画の伝統を継ぎながらも、表現等に若干の新味がみられる興味深い資料である。

博物館だより No. 6

発行日 昭和48年10月1日
発行者 岡山県立博物館
館長 村井董直
岡山市後楽園1-5
TEL(岡山)72-1148

